

国家の下位アクターに注目し、国際関係論を再検討する

—ポスト「イスラム国」時代のクルド人の活動—

今井宏平（地域研究センター）

聞き手：能勢美紀（図書館）



トルコ的外交を中心に中東の国際関係を研究している今井宏平氏

—まず、どうして「クルド人」についての研究プロジェクトを立てようと思ったのか、うかがいたと思います。

日本の中東研究は、中東のそれぞれの国レベルでみると世界的にもかなり盛んだと思うのですが、クルド人は「国がない」ということもあって、日本ではそれほど研究が進んでいませんでした。そうした問題意識から4年前に「クルド研究会」は始まりました。これまで、研究の蓄積があまりなかったところに、特に現状分析に比重を置いて、みんなでいろいろ話し合ってきました。

—今年度から始まった「ポスト『イスラム国』時代のクルド人の活動」研究会は、クルド人についての研究プロジェクトという意味では4年目に当たりますね。今年新たにこのプロジェクトを立ち上げた理由や、最初の

3年間のクルド研究会との違いは何でしょうか。

去年、クルド人を巡る問題では、北イラクで住民投票があったり、「イスラム国」との戦いの中で北シリアのクルド人がかなりの領地を占領したりして、国際政治に非常に大きなインパクトを与えました。そうしたクルド人の活動を、少し時間がたってから、しっかり分析する必要があるのではないかなと思って、今年のプロジェクトを立ち上げました。

●既存の国際関係論への挑戦

—最初の3年間で「現状」を分析することだったのに対し、今年度からは「過去の事象」の意味を分析する、ということですね。分析を始めてみて手ごたえはいかがですか。

自分の専門である国際関係論は、基本的に国家が分析の主要な単位になっています。なので、「国をもたない民族」といわれるクルド人をどう分析したらよいかというのは、非常に難しいのです。

ただ、最近の中東やアフリカの現状を見ると、国単位で分析することがあまり効果的ではないところもあると思います。特にシリアや、イラク、イエメンなど、大きい戦争を経験していたり、現在していたりするような国は、国単位で考えても、なかなか現状が



見えてきません。

もっと小さな、国家より下位のアクターということで考えると、クルド人の組織はかなりまとまりが強く、中東の、特にシリアとかイラクにおいて非常に重要な役割を果たしていると思います。そういう点で、クルド人の組織は分析していて難しいのですが、面白いと感じます。主権国家中心の現在の国際関係論の限界を示す、あるいは修正する、いい事例分析になっているのではないかと思います。

——国家よりももう一つ下位のアクターとしてクルド人の組織はかなりまとまりが強い、ということですが、個人的には、クルド人は非常に多様だと感じます。そのような中でどのように分析していくのでしょうか。

今、おっしゃったように、クルド人は非常に多様なので、世俗的なクルド人もいれば、すごく保守的で、イスラムを大切にしているクルド人もいます。「クルド人」というまとまりはイランに住んでいても、シリアに住んでいても、トルコに住んでいても、イラクに住んでいても、大切にしますが、一方で、イランの、トルコの、シリアの、イラクのクルド人っていう意識も強いので、現実的に考えて、クルド人で国家を横断してまとまるというのは難しいのではないかと、とは思っています。

また、各国のクルド人たちの求めているものもかなり違っていると考えようになってきました。例えば、北イラクのクルド人は明確に国家を目指しています。一方で、シリアのクルド人のように、地方自治とか、コミュニティごとの自治を重視している人たちもいます。

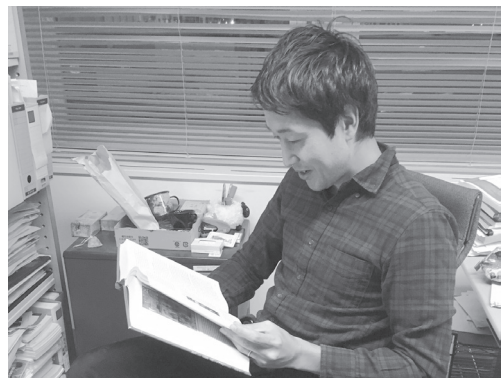
各地域のクルド人が目指す、独立とか、統治を維持するやり方というのが結構違って、その辺はやはり中東を見るうえでも重要だと思います。例えば、未承認国家とか非承

認国家という議論だと国家を目指しているのが前提になってしまいますが、そうではない下位アクターもあるという事例になります。こうしたクルド人組織の多様な統治形態の模索は分析に値するのではないかと考えています。

●クルド人組織の理論的分析を

——既存の国際関係論への挑戦、ということで研究にあたって、まず取り組みたいことは何でしょうか。

挑戦したいことはいくつかありますが、まず、クルド人の中でも PKK（クルディスタン労働者党）とトルコ政府との対立をもう少し理論的な部分から分析したいと思っています。何でこんなに長く抗争が続いているのか、何でこんなに解決しないのか、というのを時系列的に追うだけでなく、それを、例えば国際関係の紛争や内戦の研究の視点から、理論的な部分にフォーカスしていきたいと思っています。これを問いとして明らかにしていく方が、親国家であるトルコ、シリア、イラン、そしてイラクとの関係も含めて分析しやすいのではないかと思います。クルド問題に関しては、これまでそういう試みが日本ではあまりなされてこなかったと思うので、まず取り組んでみたいですね。



研究会メンバーも多く執筆した『クルド人を知るための55章』（明石書店）を手に